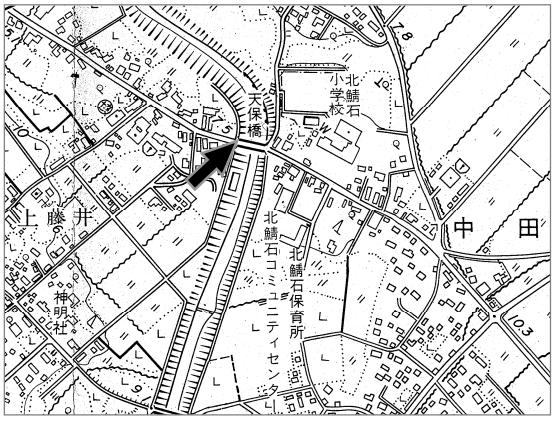
「柏崎の橋」２６　天保橋（中田・上藤井）

鯖石川を渡って中田と上藤井を結ぶ天保橋は、天保年間に作られた橋を起源とする。当時の橋は現在の天保橋より南、かつて中田の渡し舟が行き来していた場所に架けられていた。『柏崎市史資料集 民俗篇』には、天保６年に新たな橋を架けた際、藤井村や中田村など８か村で取り交わした証文が記されている。そこには、昔から舟で鯖石川を渡っていたが川東の村の人々が不便であったため橋を作った、とみえる。

明治２５年、細く曲がりくねった柏崎小千谷間の道が直線的に作り直され、天保橋も新しい道にあわせて現在の場所に架け替えられた。しかし、わずか５年後の明治３０年夏、鯖石川が氾濫し天保橋は流出の危険にさらされた。柏崎小千谷間の新道開鑿（かいさく）に多大な貢献をした尾崎修蔵は、流出を防ぐため橋の上に立ち「この老人を見殺しにするか。」と言ったという。この言葉を聞いた村民は奮い立ち、力をあわせて橋の流出を防いだ。

そんな天保橋も老朽化が進み、昭和８年１２月、コンクリート製の永久橋に架け替えられた。「日吉神社の鳥居の石材を運ぶ時は補強してもなお危険な有様であった。」という旧橋は、「モダン天保橋」と新聞で紹介されるなど面目を一新した。またその頃、中田では「天保橋小唄」なるものが作られたという。『長栄』（中田長栄会発行）第１９号によれば、これは当時全国で流行していた「銀座の柳」の替え歌で、次のような歌詞であった。



天保橋の位置
柏崎都市計画図（平成９年作成）より

天保橋に歩道橋が新たに設置され、渡り初めが行われた時の写真（昭和４５年１２月１１日）

替えてうれしい天保橋よ　昔なごりのあの小舟
西は藤井で東が中田　今日も来る来る人通り

橋はその後、昭和４５年に歩道橋が設置されるなど改修が重ねられ、中越・中越沖地震を耐えて約８０年経った今も現役である。古くから人々の生活を支えてきた天保橋は、昭和初期には「如何なる馬車も自動車も何等の不安なく自由自在に交通し得る」と紹介され、近頃では中田郵便局の風景印（消印）に橋からの眺めが図案化されている。この橋がただの実用的な構造物ではなく、人々に名所として信頼され、親しまれていることがわかる。

中田郵便局の風景印
（天保橋から望む中田の渡し、刈羽三山）
協力：中田郵便局
※風景印を押してもらうには、５０円以上の切手か葉書が必要です。

●参考にした本
土と水と光（224 ｷﾀ）北鯖石郷土誌編集委員会 編
新潟県刈羽郡北鯖石村農村調査報告書（318.2 ﾅｲ）内藤哲夫 著
長栄 第１０・１９号（860 ﾅｶ）中田長栄会 編
いしぶみ人物伝（224 Ｋﾌﾙ）柏崎ふるさと人物館 編